

那珂川町の文化財 XIV

後野・山ノ神前遺跡群



2005年
那珂川町教育委員会



はじめに

私たちの周囲には、数多くの「遺跡」があります。遺跡は、先祖が残してくれた大切な歴史資料であり、本や記録などの文字資料では知ることができない、人々の生活や知恵、苦労などを直接的に私たちへ語りかけてくれます。

後野・山ノ神前遺跡群は、ゴルフ場拡張工事に先立ち発掘調査を行なったものです。現地は標高が200mを超え、山と谷とが交互に連なる非常にけわしい山奥で、現代に生きる私たちにとって、そこに人々が暮らしを営み、活動の拠点とした場所とはまったく想像できませんでした。

今回、発掘調査を行なった結果、縄文時代の初めと終りごろの住居のあとと、奈良時代の大規模なお祭りのあとが見つかりました。縄文時代の住居は、町内でもいくつか見つかっていますが、奈良時代の大規模なお祭りのあとは珍しく、実際に発掘調査が行なわれ内容が明らかになったのは、九州ではこの遺跡が初めてです。

これから、遺跡の内容を解説しますが、この冊子をとおして皆さんが古代の人々の知恵や工夫、さらにはそこに秘められた願いや祈りの一端に、ふれていただければ幸いと願っています。



かめ棺墓の埋葬のようす(イラスト:早川和子)

縄文時代

縄文時代の遺跡の数はあまり多くありませんが、早期(約10,000年前)と、晩期(約3,000年前)のものがみついています。早期の遺跡は「住居」で、大きさは直径3mほどの円形をしています。家の中心には、食べ物を煮炊きしたり、寒さをしのいだりするための炉が作られています。炉は、地面を「おわん」のように掘りくぼめて、熱が逃げないように、平な石をしきつめて作っています。このような炉は、縄文時代の早期によく見られる作りで、那珂川町では中原の深原遺跡群からみついています。晩期の遺跡は、「土壇^{どこう}」という長方形の素掘りの穴で、山田西遺跡群や中原・ヒナタ遺跡群からもみついています。



炉の跡



住居跡

炉は、直径が80cmから1mほどの大きなものです。石は板のように平らなものを使っています。ここで発見された炉は、すべて中に石がつめ込まれていました。おそらく、当時の人々は、ここを居住地としたのではなく、当時の重要な食料である「イノシシ」や「シカ」などの狩りのときに、ここでキャンプを行ったようです。そして、狩りが終わると、次に来る時のために、炉が土に埋もれたり、こわれたりしないように、工夫をこらしたのでしょう。

このように、当時の人々にとって、炉は生活に欠かせない、とても重要なものであったようです。



ぼうすい車

左の写真は、「ぼうすい車」といいます。割れて半分ほどしかありませんが、もともとは円形で、まんなかには棒をとおすための穴があげられています。

ぼうすい車は、糸をつむぐときによりをかける「はずみ車」の役割をはたすもので、表面には、くしのような細かな工具を用い、もようを描いています。



縄文土器

土器の出現

日本では縄文時代に、現在のなべや食器の始まりでもある土器が発明され、当時の生活に大きな変化をもたらしました。それまでは、生か焼くことでしか食べることができなかった食べ物に、新しく「煮る」「むす」という調理法が加わりました。貝を「にぼし」して保存食料を作ったのでしょうか、「貝づか」が各地で作られるようになったのもこの時代です。また、土器の出現で水などの液体のほかにも、さまざまな物をたくわえることができるようになりました。

もよう

縄文時代の土器には、貝や竹・縄など、さまざまな道具を利用して、「もよう」を描いているものがあります。上の写真は「押し型文」と呼ばれ、表面をだ円や山型、こうし状にけずった木をころがすことによって「もよう」を付けたものです。これには、単に「もよう」として土器の表面をかざるだけでなく、土器を焼くときにひび割れがおこりにくくする、という役割もあるのです。

たべもの

この時代の人たちは、いったい何を食べていたのでしょうか。それを教えてくれるのが、先ほど土器のところで紹介した「貝づか」です。「貝づか」は今でいうゴミすて場で、貝のほかにも魚や動物のほねなどが、多く捨てられています。福岡北部で調査された貝づかから見つかった、主な食べ物には次のようなものがあります。

貝……ハマグリ・マガキ・オキシジミ・ハイガイ・アワビ・サザエ
 魚……スズキ・ボラ・タイ・フグ・ハゼ・エイ・イワシ・サバ・アジ
 動物……シカ・イノシシ・イヌ・タヌキ・イタチ・キジ・サギ・カモ・カメ
 木の実…オニクルミ・ドングリ・スダジイ・イチイガシ・ヤマモモ

奈良時代

縄文時代の人々が、狩りをしながら生活を営んだこの地は、このあと約1,700年ものあいだ、だれも訪れることがありませんでした。ところが奈良時代になると、信仰の場所として使われるようになります。

この遺跡では、二つの区域からお祭りのあと「祭祀遺構」が見つかっています。一カ所は谷底の沢へ、はり出す、広くなだらかな場所で、もう一カ所は、この谷を見下ろす丘の先端で発見されています。人々は大きな岩を神さまに見立て、そのまわりでさまざまなお祭りを行ったようです。ここからは、仏教の法具をまねした土器や、この場所では役に立つはずもない、塩を作るための土器、日常の生活では使われることがない、ていねいに仕上げられた土器などをお供えして祭りをしました。



山ノ神遺跡群Ⅱ区



祭祀遺構土器出土状態

左の写真は、丘の上で見つかった祭りのあとです。岩は1 mを超える大きなものばかりで、人々が運んできたのか、ここだけにまとまって見つかりました。下の写真は、その中心にある岩で、船のような形をしています。このような、大きな岩を神様との境に見立て、その前でお祭りすることを「磐境—いわさか—」といいます。



祭祀遺構

左の写真は、谷へのはり出しで見つかったお祭りの一つです。ここでは、大きな岩ひとつひとつを神様に見立て、お祭りしています。岩の前には、多くの土器を並べるものや、わざと細かく割ってお供えするものなどさまざまです。ここでは、お祭りのほかに、お参りに使われたと考えられる道のあとも見つかっています。



お祭りに使われた土器

上の写真は、お祭りに使われた土器です。土器は、私たちが使う茶わんと同じようにカマで焼かれた須恵器と、そのまま野焼きされた土師器の二つの種類があります。土器のお供えは丘のお祭りではあまり見られず、谷のお祭りに集中しています。丘の上の神様と谷の神様では、お願いする内容がちがっていたのかもしれませんが。遺物は、土器のほか鉄の矢じりが見つっています。

いろいろな祭り

これまで、この遺跡のお祭りのようすを見てきました。町内では、縄文時代のお祭りのあとはまだ見つかりませんが、弥生時代から奈良時代までのお祭りと、鎌倉・室町時代のお祭りに使われた土器が見つっています。次に、それらをいくつか紹介します。



弥生時代中期(約2,000年前)の祭りのあと

安徳台遺跡群(大字安徳)

弥生時代中期(約2,000年前)の祭りのあとです。祭りは、ここに葬られた首長一族のために行われました。土器には丹と呼ばれる赤い色がぬられ、わざと割ったような状態で発見されました。このなかには、当時としてはとても貴重な、鉄製のおの斧もありました。



弥生時代後期(約1,800年前)の祭りのあと

安徳原田遺跡群(大字安徳)

弥生時代後期(約1,800年前)の祭りのあとです。この一帯には村があり、祭りは村を流れる溝のなかで行われました。おそらく、生活に欠かせない水が、絶えることなく流れることを祈ったのでしょう。祭りには、全面に丹をぬった特殊な形をした器台や、ツボやカメが使われていました。

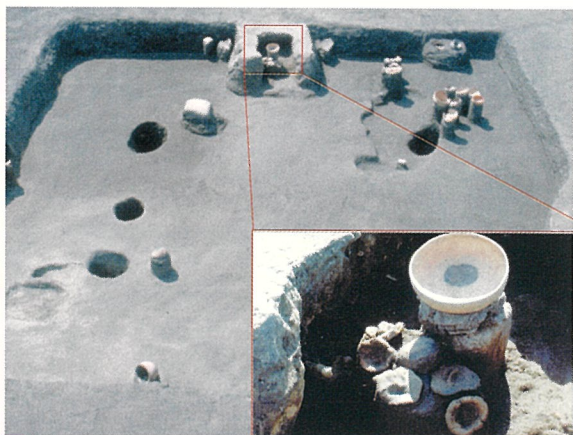


古墳時代中期(約1,600年前)の祭りのあと

松木遺跡群(松木)

左は古墳時代中期(約1,600年前)の祭りで、溝からはり出すようにして掘られた、大きな土壇のなかで行われました。すぐそばには、裂田溝(さくたのうなで)という「日本書紀」にも記載されている古代の用水路があり、田畑をうるおす水に感謝し、作物の豊作を願ってお祭りを行ったのでしょう。祭りには、土で作った勾玉やミニチュアのツボやカメ、このほかに多くの土器が使われました。土器のなかには陶質土器という、韓国で作られた土器も含まれていました。

左下は古墳時代後期(約1,500年前)のお祭りで、住居のカマドのなかで行われました。カマドは食べ物を調理する大切な場所で、ぬくもりも与えてくれます。引越しなど住居を移るときに、カマドの神様を鎮め、いつもカマドに火がともせることを祈って、お祭りをしたのかもしれません。カマドのなかには、土で作った鏡、勾玉やミニチュアのおわんなどが並べられ、お祭りのあと、焼けた土でカマドのなかを埋めていました。



住居のカマドの祭りあと

まとめ

町内では紹介したもののほかに、いくつかのお祭りのあとが見つっていますが、それらは特定の人や家、村など対象が限られ単独で発見されています。ところが、後野・山ノ神前遺跡群ではまとまっていて、お供えされた土器も、特別なものが多く含まれています。お祭りが「磬境」という特殊なものであることから、小さな単位ではなく、広い地域のお祭りとして行ったものと考えられます。

今に受けつがれるお祭り

これまでは、那珂川町で発見された古代のお祭りのあとを紹介しました。お祭りは、政治と一体となっていたものから、時代を経て政治と離れ、人々の思いや願いによって様々な形に変化し、また、それを必要とする人々によって、新しく作りだされてきました。

現在でも私たちの身近なところでは、四季折々の様々なお祭りが行われています。ここでは、その内のいくつかを紹介します。



どんど焼き

どんど焼き(町内)

正月明けに行われます。わらを芯にして青竹で囲み、そこにしめ縄やお正月のお飾りを入れて燃やします。この火で焼いた鏡餅を食べたり、火にあたったりすると病気をしないといわれています。「左義長^{さぎちやう}」や「ほんげんぎよう」ともいわれ、昔は宮中行事として行われました。



もぐら打ち

もぐら打ち(町内)

どんど焼き同様、正月明けに行われます。田んぼや畑を荒らすもぐらを追い出し、豊作を祈ります。お祭りの主役は子どもたちで、竹の先にわらをかたく束ね、歌を歌いながら地面をたたきます。「もぐらおい」、「もぐらおどし」ともいわれ、昔は農家の子どもたちが年初めに行う、最初の行事でした。



ぎおん祭

ぎおん祭(山田)

伏見神社で、7月14日の夕方から行われます。「岩戸神楽」が奉納され、多くの人たちでにぎわいます。神楽は18番あり、「荒神」や「問答」に登場する鬼に抱かれた子どもは元気に育つといわれています。昭和29年、福岡県で初めての無形文化財に指定されました。



輪ごし

輪ごし(市ノ瀬・山田・仲)

7月31日の夜に、日吉神社・伏見神社・現人神社で行われます。鳥居に付けられた大きなカヤの輪をくぐると、その年の夏は病気をしないといわれ、夏の風物詩の一つになっています。出店も多く、夏祭りとあわせて行う地域もあり、多くの人たちでにぎわいます。

おくんち(仲)

10月の第三日曜日に、現人神社で行われています。作物の豊作を、神様に感謝する祭りです。お祭りでは、子どもたちによる相撲大会や、馬上から弓で的を打ち抜く流鏑馬^{やぶさめ}が行われます。このような行事は周辺でも珍しく、町外からも多くの見物人が訪れます。

びしゃもんてん

毘沙門天祭り(別所)

とうじ
冬至の日、大山住神社の毘沙門堂で行われます。毘沙門様から、お金(福銭)を借りて財布に入れるとお金に困らないといわれ、翌年にはお礼を添えて借りたお金を返します。また、カボチャぜんざいもふるまわれ、これを食べると、火事の火元にならないといわれています。



おくんち(流鏑馬)



毘沙門天祭り

おわりに

お祭りは、人間が努力してもかなえられないものや自然の力に対し、神様にお願いしたり感謝したりすることから始まりました。後には、対象が特定の物や人物など様々なものに広がり、地域の人と人を結びつける場として、重要な役割

を果たしてきました。現在、お祭りは「祭りなかがわ」のように、イベントの代名詞としても使われ、意味合いが変化しつつありますが、私たちはこの遺産を文化として継承しながら、新たに育てるという重要な役割を担っているのです。

那珂川町の文化財Ⅻ

後野・山ノ神前遺跡群

2005年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈64-1

印刷：山崎印刷
福岡県筑紫郡那珂川町仲467

